

CLCP を通した学生のキャリア発達と 利他的マインドの関係に関する基礎的研究

Basic Study about the Relationship between Altruistic Mind and Career
Development of Students Through the CLCP

有山篤利・平山奈央子⁽¹⁾・柴田雅美⁽²⁾・富川拓

Ariyama Atsutoshi, Hirayama Naoko, Shibata Masami, Tomikawa Taku

要 約

地域力循環型キャリア教育プログラム（CLCP）と命名された本学独自のキャリア教育では、若者の利他的マインドの育成を第一義的なねらいとし、「自己のための能力開発のみを志向した活動を超え、他者からの期待を感受しながら集団や社会の発展に寄与する活動を志向したキャリア形成」が目指されている。本研究では、キャリアデザイン C/D の受講生を対象に、CLCP の中核プログラムとなる「学びのフリーマーケット・聖泉 CLC セミナー」を通して得た経験、それを通じて身に付けた考え方や将来のキャリアビジョン等と「利他的なマインド」の関係をアンケート調査によって検証し、利他的マインドの育成がキャリア教育の実践にとって重要な意味を形成する可能性を考察するとともに、CLCP のキャリア教育としての意義を検討した。その結果、CLCP による利他的なマインドを育成する学習が、地域貢献マインドの育成や仲間への信頼感の醸成、活動意欲の向上、将来のキャリアビジョンに対する明るい展望など、キャリア教育において重視すべき意味ある価値と結びついていることが示唆された。

Key Words：地域力循環型キャリア教育プログラム（CLCP）、利他的マインドの育成

1 はじめに

近年、社会の他方面において、学校から社会・職業への円滑な移行の不全や若者の社会的・職業的自立に向けた課題が指摘されるようになった。このようななか、学生の資質能力に対する社会からの要請や、学生の多様化に伴う卒業後の職業生活等への移行支援の必要性が叫ばれるようになったことに伴い、平成22年には大学設置基準の改正が行われ、大学におけるキャリアガイダンスの推進が明記された。また、同様の流れの中で、文部科学省からの審議依頼を受けた日本学術会議から、大学教育の職業的意義の向上や、就職活動の在り方の見直しなど、「大学と職業との接続の在り方について」の提言（日本学術会議、2010）が行われるとともに、中央教育審議会からは「今の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（中央教育審議会、2011）が提出されるなど、幼児期の教育から高等教育に至るまでの体系的なキャリア教育の推進が学校教育に対して求められるようになった。

(1) 滋賀県立大学 (2) 滋賀大学

このような背景のもと、本学においても、平成21～23年度文部科学省「大学教育・学生支援推進事業（学生支援推進プログラム）」^(注1)の委託を受けたことをきっかけに、本格的なキャリア教育に関するカリキュラム改善に取り組み、「地域力循環型キャリア教育プログラム（Carrier learning in Local-power Circulation Program：以下略してCLCP）」と命名した独自のプログラムを展開している。このキャリア教育プログラムでは、本学の建学の精神である「社会奉仕と地域貢献」及び教育理念である「人間に対する理解を深め、地域社会に貢献できる人材の育成」をバックボーンとして、地元NPO法人や中小企業との協働関係を築き、その地域ネットワークのなかで若者のキャリア発達を促し、地域の人材として地域に根付いた若者を育成することを主旨とした独自の学習を展開している。

CLCPは、現在、平成24年度文部科学省委託事業である「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」のなかで、滋賀・京都・奈良の16大学連携プログラム^(注2)における聖泉大学の取り組みとして継続・発展しており、地域を舞台にしたアクティブラーニング型のキャリア学習として注目されている。

2 CLCPの教育理念

2011年に出された中央教育審議会答申によれば、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義され、その基本的方向性として、基礎的・汎用的能力を確実に育成するとともに、社会・職業との関連を重視することが求められている。すなわち、キャリア教育で仕込まれるべきキャリア発達には自己と社会との関係への理解が焦点化されていなければならない。換言すれば、「他者の生活」と「自己の生き方」との関係性を納得した上で、各々のキャリア形成がなされねばならないことを示している。例えば、菊池（2008）が、「過去・現在・未来の時間軸の中で、社会との相互関係を保ちつつ、自分らしい生き方を展望し、実現していく力の形成の過程である」とし、働くことのなかで自分を生かし、そのことを通して社会の一員として主体的に生きていく力を様々な経験を通してキャリア発達を促すことの重要性を指摘し、白木（2010）が、職業が個人だけの問題にとどまるものではなく、集団や社会との関係や繋がりのなかで他者に及ぼす影響を視座に入れた職業意識形成の重要性を主張しているのも、キャリア教育で展開する学習の中核に、自己と他者、あるいはその集合体として社会との関係性について本質的理解を迫る内容が不可欠であることを指摘するものであろう。

しかし、現在、実際に行われている一般的なキャリア教育においては、社会と自己の関係を掘り下げることなく、専ら自己の内面や未来との対話を通して自己のなかで完結するキャリア発達が仕組まれがちである。例え、学習の場として企業や学外の活動が確保されていたとしても、それはあくまでも、自己のキャリア形成のための場と機会の提供に過ぎない場合が多い。このようなキャリア教育の現状について、石田（2010）は、キャリア教育が「なりたい自分の検討」による自己都合を前提にした会社選択や職業選択に陥りがちであること、そして、キャリア教育が

そのような就職ガイダンスの範疇に留まるものではなく、どのような価値を提供できるのかという価値創造の視点をもって取り組まれる必要性を指摘している。

2011年の中央教育審議会答申に、このような文章がある。

「人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。(中略)人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。」

「人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり『働くこと』を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが『自分らしい生き方』となっていくものである。」

佐伯(2012)は、人の幸福について、『個人の次元で幸福になろうとすると、人は幸福の可能性をなくすために幸福を追求する、というディレンマに陥ってしまう』、『他人が幸福になってくれることが私の幸福だ』というロシアの小説家トルストイの言を引き合いに出しながら、「私が幸福になってほしいと思う人が、私の関与によって幸福になることによって自らの幸福が保障される」と喝破している。すなわち、私が「他者の幸福創造に関与する」ことによって、「私の幸福」が獲得できるというのである。同様に、内田(2008)は、「人の社会がベネフィットを分かち合うことによってベネフィットの継続的な享受システムを築きあげている」という事実を、人類学的常識であると述べている。また、それゆえに労働に自分の能力や成果に応じた賃金を求めることは誤りで、労働は本質的に「自分に要求される成果を自らの能力を超えて達成するようなオーバーアチーブなもの」であるという自覚が、今、我々に必要なことを主張している。さらに内田は、このような考察をもとに、現代の自己決定や自己責任論に基づく個人主義的なキャリア教育の弊害を指摘し、自己利益追求の延長にキャリア発達を描くことの危うさについて警鐘を鳴らすとともに、生涯にわたって労働することへのモチベーションを賦活するためには「私の労働を喜びとする他者がいる、私からの労働の贈り物を嘉納してくれる他者がいる」という考え方を内面化することに尽きると主張する。

もし、佐伯の指摘するように、人の幸福が他者への幸福の贈与によって達成され、内田の指摘するように、我々の社会制度がオーバーアチーブな行為(労働)によって得られた余剰生産物の交換によって成立しているならば、人が社会の構成単位として自立し、真に社会的存在としてのアイデンティティを確定するためには、他者へ価値を贈与し分け与えることに対して喜びや幸福感や充実感をもてるパーソナリティを確立することが、第一義的に目指されねばならない。

これらの論説を基に、有山ら(2011)は、労働にオーバーワークの原則があることを簡単な数式を用いて説明するとともに^(注3)、若者のキャリア発達を「価値の消費者から供給者へのメタモルフォーゼ」として捉える考え方を示した。そのうえで、若者の利他的マインドの育成を第一義的なねらいとし、「自己のための能力開発のみを志向した活動を超え、他者からの期待を感受しながら集団や社会の発展に寄与する活動を志向したキャリア形成(有山ら, 2010)」を系統的なプログラムとして構造化したCLCPを実践している。

3 研究の目的

CLCP は、「利他的なマインドの育成」を第一義的なねらいとして学習が展開される点に大きな特徴があり、一般的なキャリア教育で行われるような基礎的・汎用的な能力開発やソーシャルスキルの習得、あるいは自己の将来像の確定などを学習のねらいにおくのではなく、あくまでもそれらは、地域における諸活動に貢献することによって得られる周囲からの期待と感謝によって得られる教育効果と位置づけられている。

本研究は、CLCP の大きな特徴であり、その学習の第一義的なねらいとなる「利他的マインド」の育成が、実際にキャリア教育として意味ある活動となり得るものであるのか、その可能性を実証的に明らかにしようとするものである。先に述べた CLCP の理念と学習構造は、あくまでも社会活動の諸相や先攻研究等から主観的に理論構築されたものであり、それを客観的なデータをもとに実証的に補完することはできていなかった。そこで本研究では、キャリアデザイン C/D の受講生を対象に、CLCP のなかでも中核プログラムとなる「学びのフリーマーケット・聖泉 CLC セミナー（以下略して CLC セミナー）」^(注4)を通して得た経験、それを通じて身に付けた考え方や将来のキャリアビジョン等と「利他的なマインド」との関係进行分析することにより、利他的マインドの育成がキャリア教育の実践にとって重要な意味を形成する可能性を検証するとともに、CLCP のキャリア教育としての意義を確認したいと考える。

4 研究の限界

本研究は、CLCP の学習前後の変化をみたものではない。したがって、CLCP の学習効果として「利他的なマインドの育成」に取り組んだことによる学生の変容を明らかにするものではなく、あくまでも、CLCP の学習を終えた学生に芽生えた「利他的マインド」が、自らの生活や将来に向けた意識とどのような関連があるかを明らかにしようとするものである。

また、調査の対象は人間学部2年生であるが、サンプル数は56名に過ぎないため、得られた知見については断定できるレベルのものではなく、分析対象となった学生の限定的な状況を表したもとの位置付ける必要があり、得られた知見は今後の研究の継続発展を図るための基礎的資料としての域を出ないものとする。

5 研究方法

5-1 調査の対象

人間学部キャリアデザイン C/D（前後期各1単位、2年生必修）の受講者で、CLCP の中核的プログラムとなる「第3回 CLC セミナー」に取り組んだ学生57名を対象にした。男女の差については、調査に影響がないものとして考慮しないこととした。また、分析にあたっては有効な回答を得られなかった1名を除き、56名を分析の対象とした。

5-2 調査時期

キャリアデザインC/Dの授業のなかで開催された「第3回CLCセミナー」（平成24年11月17日～18日）の終了後、11月23日に行ったまとめの授業のなかでアンケート調査を実施した。

5-3 アンケート調査票の作成

アンケート調査票については記名式とし、授業後の感想を問う形式で独自のものを作成した。内容に関しては、①イベント開催という体験に関する感想を問う「期間中の体験」に関する質問（4問）、②イベントを終了した後に感じている利他的マインドについて問う「現在の気持ち」（4問）、③将来の見通しについて問う「将来のキャリアビジョン」（3問）の3つのカテゴリーに分け、合計11項目の問いを作成し、5件法で回答することとした。

アンケート調査の設問は以下の通りである。

《期間中の体験》

1 あなたは、CLCセミナーを通じて他者からの「期待」や「感謝」を感じましたか？

①たくさん感じた ②少し感じた ③どちらでもない ④あまり感じなかった ⑤まったく感じなかった

2 あなたは、CLCセミナーを通じて「達成感」を感じましたか？

①たくさん感じた ②少し感じた ③どちらでもない ④あまり感じなかった ⑤まったく感じなかった

3 あなたは、CLCセミナーに「意欲」を感じながら取り組みましたか？

①たくさん感じた ②少し感じた ③どちらでもない ④あまり感じなかった ⑤まったく感じなかった

4 あなたは、今回のCLCセミナーでは団体の方や市民の方に喜びや感動を与えたと思いますか？

①強く思う ②少し思う ③どちらでもない ④あまり思わない ⑤全く思わない

《現在の気持ち》

5 あなたは、「他者のために働くこと」に喜びを感じますか？

①強く感じる ②少し感じる ③どちらでもない ④あまり感じない ⑤全く感じない

6 あなたは、今、「地域（滋賀県や彦根市）や市民のために貢献したい」と思いますか？

①強く思う ②少し思う ③どちらでもない ④あまり思わない ⑤全く思わない

7 あなたは、「他者のために働くこと」が自分の幸福につながると思いますか？

①強く思う ②少し思う ③どちらでもない ④あまり思わない ⑤全く思わない

8 あなたは、聖泉大学の仲間は信頼できると思いますか？

①強く思う ②少し思う ③どちらでもない ④あまり思わない ⑤全く思わない

《将来のキャリアビジョン》

9 あなたは、卒業後、滋賀やあなたの地円で就職し、地域に貢献しようと思いますか？

- ①強く思う ②少し思う ③どちらでもない ④あまり思わない ⑤全く思わない

10 あなたは、将来自分が地域や企業に夢を与えていけると思いますか？

- ①強く思う ②少し思う ③どちらでもない ④あまり思わない ⑤全く思わない

11 あなたは、自分の将来が明るいと感じますか？

- ①強く感じる ②少し感じる ③どちらでもない ④あまり感じない ⑤全く感じない

5-4 分析方法

学びのフリーマーケット・聖泉 CLC セミナー」を通して得た経験や、それを通じて身に付けた考え方や将来のキャリアビジョン等と「利他的なマインド」との関係性を明らかにするために、アンケート調査票の11項目の各問（5件法）について設問間の単相関係数を求めた。分析はエクセル統計2006 for Windows を使用した。

6 結果

6-1 回答の全体的な傾向について

問1～11までの設問に対する回答の人数を表1及び図1に示した。

全体を通して肯定的な回答「たくさん感じた」・「少し感じた」を選択する学生が多く、否定的な回答「あまり感じなかった」・「全く感じなかった」とする学生は少ない傾向にあった。最も否定的な回答の多かった問11においても56名中7名であった。問9-11については、「どちらでもない」と回答する学生がやや多くなる傾向があった。

表1 設問に対する回答の人数表

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11
たくさん感じた	33	33	25	23	29	17	32	28	23	16	18
少し感じた	19	17	19	23	22	26	16	17	17	19	16
どちらでもない	1	3	6	7	5	11	5	7	12	19	15
あまり感じなかった	3	3	4	2	0	2	2	2	3	1	5
全く感じなかった	0	0	2	0	0	0	0	2	1	1	2

6-2 設問間の単相関について

設問間の単相関を表2に表した。単相関係数が中程度の有意な相関については多くの設問間でみられたが、本研究では0.5以上の「やや強い相関」及び0.7以上の「強い相関」を示した項目を対象に分析することとした。その結果、合計11個の設問間において「やや強い相関」及び「強い相関」相関関係を示した。最も高い相関を示した設問は問10と問11であり、問1については4つの設問に対して相関関係が認められた。

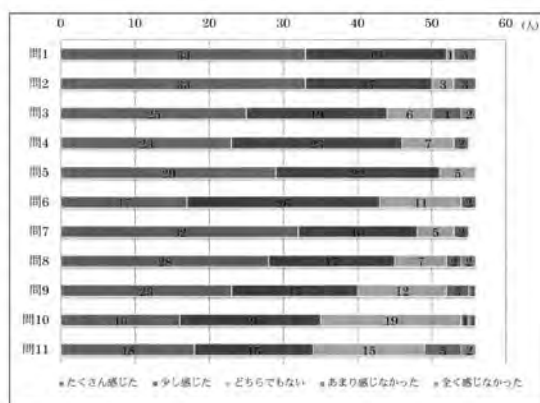


図1 設問に対する回答人数グラフ

表2 設問間の単相関係数

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11
問1	1										
問2	0.407 **	1									
問3	0.510 **	0.385 **	1								
問4	0.467 **	0.37 **	0.316 *	1							
問5	0.551 **	0.381 **	0.539 **	0.469 **	1						
問6	0.601 **	0.210	0.524 **	0.396* *	0.476* *	1					
問7	0.477 **	0.144	0.438 **	0.238	0.462 **	0.529 **	1				
問8	0.507 **	0.338*	0.262	0.533 **	0.456 **	0.484 **	0.414 **	1			
問9	0.418 **	0.157	0.430 **	0.376 **	0.365 **	0.610 **	0.454 **	0.344 *	1		
問10	0.49 **	0.193	0.269 *	0.485* *	0.489 **	0.402 **	0.273 *	0.489 **	0.281 *	1	
問11	0.490 **	0.394 **	0.205	0.585* *	0.446 **	0.387 **	0.299 *	0.482 **	0.260	0.804 **	1

N=56 ** : P < 0.01 * : P < 0.05

高い相関	0.7以上
やや高い相関	0.5以上0.7未満
中程度の相関	0.4以上0.5未満
やや弱い相関	0.3以上0.4未満
弱い相関	0.2以上0.3未満
相関なし	0.2未満

6-3 問1と他の設問との関連

問1は、CLCセミナーにおける「他者からの期待や感謝の感受」に関する設問であり、他の4つの設問との間にやや強い正の相関がみられた。

6-3-1 問1と問3の関連

問3は「CLCセミナーへの意欲」に関する設問である。問1との間には $r = .510$ ($p < .01$) のやや強い正の相関があった。

また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が圧倒的に多く(44名/56名)、この層の回答が関係に強く影響していることが伺われる(表3)。

6-3-2 問1と問5の関連

問5は「利他的行為に対する喜びの感受」を問う設問である。問1との間には $r = .551$ ($p < .01$) のやや強い相関があった。

また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が圧倒的に多く(49名/56名)、この層の回答が関係に強く影響していることが伺われる(表4)。

6-3-3 問1と問6の関連

問6は「地元への地域貢献マインド」に関する設問である。問1との間には $r = .601$ ($p < .01$) のやや強い正の相関があった。

また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が圧倒的に多く(42名/56名)、この層の回答が関係に強く影響していることが伺われる(表5)。

6-3-4 問1と問8の関連

問8は「仲間への信頼」に関する設問である。問1との間には $r = .507$ ($p < .01$) のやや強い正の相関があった。

表3 問1と問3の構成人数

データの個数 / 問1	問3					
問1	1	2	3	4	5	総計
1	21	8	1	2	1	33
2	4	11	3	1		19
3			1			1
4			1	1	1	3
総計	25	19	6	4	2	56

表4 問1と問5の構成人数

データの個数 / 問5	問5				
問1	1	2	3	総計	
1	24	8	1	33	
2	5	12	2	19	
3		1		1	
4		1	2	3	
総計	29	22	5	56	

表5 問1と問6の構成人数

データの個数 / 問6	問6					
問1	1	2	3	4	総計	
1	17	13	3		33	
2		12	6	1	19	
3		1			1	
4			2	1	3	
総計	17	26	11	2	56	

表6 問1と問8の構成人数

データの個数 / 問8	問8					
問1	1	2	3	4	5	総計
1	22	9	1		1	33
2	6	7	5		1	19
3		1				1
4			1	2		3
総計	28	17	7	2	2	56

また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が圧倒的に多く(44名/56名)、この層の回答が関係に強く影響していることが伺われる(表6)。

6-4 問3と他の設問との関連

問3は「CLCセミナーへの意欲」に関する設問であり、問1以外に他の2つの設問との間にやや強い正の相関がみられた。

6-4-1 問3と問5との関連

問5は「利他的行為に対する喜びの感受」を問う設問である。問3との間には $r = .539$ ($p < .01$) のやや強い相関があった。

また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が圧倒的に多く(43名/56名)、この層の回答が関係に強く影響していることが伺われる(表7)。

表7 問3と問5の構成人数

データの個数 / 問5	問5			
問1	1	2	3	総計
1	21	4		25
2	5	13	1	19
3	1	3	2	6
4	2	1	1	4
5		1	1	2
総計	29	22	5	56

6-4-2 問3と問6との関連

問6は「地元への地域貢献マインド」に関する設問である。問3との間には $r = .524$ ($p < .01$) のやや強い正の相関があった。

また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が多く(38名/56名)、この層の回答が関係に比較的強く影響していることが伺われる(表8)。

表8 問3と問6の構成人数

データの個数 / 問6	問6				
問1	1	2	3	4	総計
1	14	10	1		25
2	2	12	5		19
3		3	1	2	6
4	1		3		4
5		1	1		2
総計	17	26	11	2	56

6-5 問4と他の設問との関連

問4はCLCセミナーにおける「市民への喜びや感動の提供」に関する設問であり、他の2つの設問との間にやや強い正の相関がみられた。

6-5-1 問4と問8の関連

問8は「仲間への信頼」に関する設問である。問4との間には $r = .533$ ($p < .01$) のやや強い正の相関があった。また、両設問と

表9 問4と問8の構成人数

データの個数 / 問8	問8					
問1	1	2	3	4	5	総計
1	18	3	1		1	23
2	9	11	2	1		23
3	1	2	4			7
4				1	1	2
5		1				1
総計	28	17	7	2	2	56

も1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が多く（41名/56名）、この層の回答が関係に強く影響していることが伺われる（表9）。

6-5-2 問4と問11の関連

問11は「自分の将来が明るいと感じるか」について問う設問である。問4との間には $r = .585$ ($p < .01$) のやや強い正の相関があった。また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が多く（32名/56名）、この層の回答が関係に比較的強く影響していることが伺われる（表10）。

よって、CLC セミナーにおいて「市民に喜びや感動を提供できたと感じる群」と、「自分の将来が明るいと感じる群」との間に関連があることが推測される。

6-6 問6と他の設問との関連

問6はCLC セミナーを経験した学生の「地元への地域貢献マインド」に関する設問であり、問1以外の他の2つの設問との間にやや強い正の相関がみられた。

6-6-1 問6と問7の関連

問7は「利他的行為と自己の幸福の結びつき」に関する設問である。問7との間には $r = .529$ ($p < .01$) のやや強い正の相関があった。

また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が多く（41名/56名）、この層の回答が関係に強く影響していることが伺われる（表11）。

6-6-2 問6と問9の関連

問9は「地元への就職と貢献」に関する設問である。問9との間には $r = .610$ ($p < .01$) のやや強い正の相関があった。

また、両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が多く

表10 問4と問11の構成人数

データの個数 / 問11	問11					総計
	問1	1	2	3	4	
1	14	3	6			23
2	4	11	6	2		23
3		2	3	1	1	7
4				1	1	2
5				1		1
総計	18	16	15	5	2	56

表11 問6と問7の構成人数

データの個数 / 問11	問7					総計
	問1	1	2	3	4	
1	15	1			1	17
2	14	11	1			26
3	2	3	4	2		11
4	1	1				2
総計	32	16	5	2	1	56

表12 問6と問9の構成人数

データの個数 / 問9	問9					総計
	問1	1	2	3	4	
1	14	2	1			17
2	7	14	4		1	26
3	2	1	6	2		11
4			1	1		2
総計	23	17	12	3	1	56

(37名/56名), この層の回答が関係に比較的強く影響していることが伺われる (表12).

6-7 問10と他の設問との関連

問10はCLCセミナーを経験した学生の「地域貢献への自信」に関する設問であり, 問11の設問との間に強い正の相関がみられた.

6-7-1 問10と問11の関連

問11は「自分の将来が明るいと感じるか」について問う設問である. 問11との間には $r = .804$ ($p < .01$) の強い正の相関があった.

また, 両設問とも1「たくさん感じた」・2「少し感じた」とする肯定的な回答が多く (31名/56名), この層の回答が関係に比較的強く影響していることが伺われる (表13).

表13 問10と問11の構成人数

データの個数 / 問11	問11					
問1	1	2	3	4	5	総計
1	12	3	1			16
2	5	11	2	1		19
3	1	2	12	3	1	19
4				1		1
5					1	1
総計	18	16	15	5	2	56

7 考察

7-1 考察の枠組み

本研究は, CLCPにおいて重視される「利他的マインドの育成」が, 実際にキャリア教育として意味ある活動となり得るものなのか, その可能性を探ろうとするものである. 調査結果では, 多くの設問間に有意な相関関係が認められた. そこで, 考察においては主に①他者からの期待や感謝がキャリア学習に及ぼす効果, ②利他的な行為と仲間への信頼感, ③活動意欲と利他的マインド, ④利他的マインドとキャリアビジョンの4点に絞って検討を加えたいと考える.

7-2 他者からの期待と感謝がキャリア学習に及ぼす効果

はじめに, 他者からの期待や感謝がキャリア教育プログラムに及ぼす効果についてである. 有山ら (2011) が報告しているように, CLCPでは「学生のキャリア発達は, 地域における諸活動に貢献することで得られる周囲からの期待や感謝と引き換えに得られる教育効果」として位置付けられている. 調査結果によれば, 問1で問いかけた「他者からの期待や感謝の感受」と問3「CLCセミナーへの活動意欲」には正の相関があり, 期待や感謝を感じた学生と熱心に取り組んだ学生の関連が強く示唆された. キャリア教育の学習活動への意識高揚に対し, 他者からの期待と感謝が重要な鍵となる可能性を示すものとする.

さらに, 問1「他者からの期待や感謝の感受」が, 問5「利他的行為に対する喜びの感受」に対して正の相関を示したことは興味深い. 分析の結果によれば, 他者からの期待や感謝を感じたと回答する群と, 利他的に働くことに喜びを感じたとする群との関連が強く示唆されている. これは, CLCPが目指す利他的マインドの育成に関して, 他者からの期待や感謝を感じる機会や場

を体験させることが非常に重要な意味をもつ可能性を示すものと思われる。

また同様に、問1「他者からの期待や感謝の感受」は、問6「地元への地域貢献マインド」とも相関関係があることを示した。CLCPは、地方に基盤をおく小規模大学として地域に貢献できる人材の育成を目指しているが、今回のCLCセミナーを通じて他者からの期待や感謝を感じた群と、地元に関献したいという群に強い関連があることが示唆された。CLCPによる利他的なマインドを育成する学習が、地域貢献マインドの育成に効果的に結びついていることを示すものと思われる。

7-3 利他的な行為と仲間への信頼感

経済産業省(2006)が社会で働くための能力として示した「社会人基礎力」では、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」とともに「チームで働く力」という3つの力を提唱している。また、中央教育審議会(2011)による「今の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」で提示された基礎的・汎用的能力では、「自己理解・自己管理能力」・「課題対応能力」・「キャリアプランニング能力」とともに「人間関係形成・社会形成能力」が明示されている。「チームで働く力」や「人間関係形成・社会形成能力」が示す通り、人のキャリア形成には集団を形成する力が問われており、仲間を信じる姿勢はその基盤にかかわる重要な態度であろう。

問8は「仲間への信頼」を問う設問であるが、問1「他者からの期待や感謝の感受」との正の相関関係がみられた。特に、仲間を信頼できると回答した群と、CLCセミナーを通して他者からの期待や感謝を感じたと回答した群の関連が推測できたことは、集団の形成する資質の育成という観点から興味深い。

また、問8「仲間の信頼」は、問4「市民に喜びや感動を提供する体験」を問う設問とも正の相関があり、CLCセミナーにおいて市民に喜びや感動を提供できたと回答した群と、仲間を信頼できるとする群の関連も推測できたが、これもCLCセミナーが仲間との信頼関係を構築する貴重な経験となっていることを示している。有山ら(2010)は、第2回CLCセミナー(平成23年11月実施)終了後の学生の感想文をテキストマイニングという手法を用いて解析し、「活動を通して仲間とのつながりや一体感が生まれ、自分たちで成し遂げたという達成感が得られた」という要約を得たと報告しているが、今回の結果はそれを裏付けるものとなった。

7-4 活動意欲と利他的マインド

先に見たように、問3「CLCセミナーへの活動意欲」と問1「他者からの期待や感謝の感受」には正の相関があり、期待や感謝を感じた群と熱心に取り組んだ群の関連が強く示唆された。また、同様に問3の設問は、問5「利他的行為に対する喜びの感受」や問6「地元への地域貢献マインド」が正の相関関係にあったが、やはり肯定的な回答をする群同士の関連が示唆された。この結果から、CLCPの特徴である利他的なマインドに基づいた地域貢献活動と学生の活動意欲が、密接に関係していることが推測される。

小田(2011)は、進化生物学的観点から人の利他行動を研究し、人類の最大の特徴は互恵的利他行動にあると指摘している。これはすなわち、「助け合い分け与え合う」ことに人類の本質的な行動習性があることを意味するものである。また、内田(2010)は、「(人の能力は)その能力が必要とされた時にはじめて潜在能力は発動する」として、「自分が果たすべき仕事を見出すというのは本質的に受動的な経験である」と喝破する。両者の論を是とするならば、人は「助け合い分け与え合う」動物であり、人は他者に求められそれに応えようとする時に自身のもつ本来のスペックが発揮されるということがいえよう。今回の調査では、学生自身の能力の変容については把握できていないが、学習意欲や労働意欲の低下が叫ばれる昨今、CLC セミナーにおける利他的マインドの育成と学生の活動意欲の間に認められた関連は、今後のキャリア教育の在り方にとって極めて示唆的であると思われる。

7-5 利他的マインドとキャリアビジョン

今回得られた知見のなかで最も興味深くかつ重要と思われる点は、問11の「自己の将来が明るいと感じるか」を問う設問に対して、問4「市民に喜びや感動を提供する体験」や問10「地域貢献への自信」を問う設問が正の相関を示したことであろう。特に、問10と問11については強い正の相関を示した。分析では、市民に喜びや感動を提供できたとする群や将来地域に貢献する自信があると答えた群と、自分の将来が明るいと感じている群との間に特に関連があることが推測できた。

社団法人全国高等学校PTA 連合会・株式会社リクルート(2011)が行った「第5回高校生と保護者の進路に関する意識調査」では、高校生の70%(男子65%,女子77%)が「将来は働くことに気がかりがある」と答え、67%(男子66%,女子71%)が「これからの社会は高校生にとって好ましくない」と回答しており、この傾向はそれ以前の調査においても同様である。これはあくまでも高校生のデータであるが、学生も含めた若者の将来のキャリアビジョンが決して明るいものでないことは、これらの調査からも容易に想像ができてよい。このような中であって、CLC セミナーにおいて市民に喜びや感動を提供できた、あるいは将来の地域貢献に自信をもつと回答する学生が、「自己の将来が明るい」と感じる傾向にあることは、利他的なマインドを育成する学習が、自己の将来的な見通しに対して、自己効力感や有能感に基づいた何らかの展望を与える可能性を示すのではないかと推測する。

8 まとめ

平成24年度の聖泉大学人間学部キャリアデザインC/Dの授業の中で、第3回CLCセミナーに取り組んだ学生を対象に、利他的マインドに関するアンケート調査を行った。得られた分析結果の中から次のような点に注目し、考察を加えた。

- ① 問1「他者からの期待や感謝の感受」と、問3「CLC セミナーへの活動意欲」・問5「利他的行為に対する喜びの感受」・問6「地元への地域貢献マインド」・問8「仲間への信頼」

の間には、やや強い正の相関関係が認められた。

- ② 問3「CLC セミナーへの意欲」に関する設問については、問1以外にも、問5「利他的行為に対する喜びの感受」や問6「地元への地域貢献マインド」に関する設問との間にやや強い正の相関が認められた。
- ③ 問8「仲間への信頼」に関する設問については、問1以外に、問4「市民への喜びや感動の提供」との間にやや強い正の相関関係が認められた。
- ④ 問11「明るい将来の確信」と問4「市民への喜びや感動の提供」との間にやや強い正の相関関係が、問10「地域貢献への自信」との間には、強い正の相関関係が認められた。

その結果、CLCPによる利他的なマインドを育成する学習が、地域貢献マインドの育成や仲間への信頼感の醸成、活動意欲の向上、将来のキャリアビジョンに対する明るい展望など、キャリア教育において重視すべき意味ある価値と結びついていることが示唆された。よって、CLCPがねらいとして焦点化する利他的マインドの育成は、キャリア教育の実践にとって重要な意味を形成する可能性を示す基礎資料を提示できたと考える。

しかし、今回の研究では、どの要因がどの状況を導いているのかその方向性を示すことはできていない。また、本研究は、分析の対象としたサンプル数が少なく、あくまでも第3回CLCセミナーに参画した学生における限定的な結果として位置付けられねばならない。今後、継続した資料収集と詳細な分析を行いながら、利他的マインドを育成することの意味を、より精緻なエビデンスに基づいてキャリア教育のなかに位置付けるとともに、これらの知見を踏まえた学習プログラムの開発に向け研究を進める必要があると考える。

注

- 1) 平成21～23年度にかけて実施された文部科学省委託事業であり、就職支援など総合的な学生支援の取組みを推進するため、私立大学を中心にした達成目標を明確にした教育力向上の取組みに対して2～3年の重点的な財政支援が行われた。
- 2) 平成24～26年度にかけて展開されている文部科学省委託事業であり、産業界のニーズに対応した人材育成を目指して、大学が地域ごとに共同し、地元の経済団体等との産学協働関係を構築して行われる取組みに対し、重点的な財政支援が行われている。本学は、「滋京奈地区を中心とした地域社会の発展を担う人材育成」をテーマとした滋賀・京都・奈良の16大学の連携協議会に所属して事業を推進中である。
- 3) 有山ら(2011)は、労働には自らの幸せをつくること以上に、会社や仲間や国の幸せをつくりだすことが義務づけられているとし、 S (salary: 給料) = V (value: 労働で作りだした価値) - P (profit: 企業の儲け) - C (cost: 仲間の給料) - T (tax: 税金) という数式を提示して、働くという行為は本質的にオーバーワークが求められることを指摘した。

- 4) CLCP の中核的プログラムであり、学生が HSJ 企画というバーチャルカンパニーを組織し、「学びのフリーマーケット・聖泉 CLC セミナー」と名付けた市民参加型イベントを2日間にわたって行う。2日間で約50～85講座が開催され、延べ2,000人前後の一般市民が参加する。講座の企画・講師の依頼・広報・運営などを自らの会社組織で行う PBL 型のキャリア学習である。

参考文献

- (1) 有山篤利・出路幸子・富川拓・柴田雅美・富章・西村泰昭 (2010) CLCP によるキャリア教育科目の学習成果に関する検討. 聖泉論叢18, pp.25-38.
- (2) 有山篤利・柴田雅美・富川拓・富章・宮内雄飛・松本英和 (2011) 地域力循環型キャリア教育プログラム (CLCP) に関する実践報告. 聖泉論叢19, pp113-125.
- (3) 石田秀朗 (2010) 価値創造という視点から考える大学生のキャリア教育論. 奈良文化女子短期大学紀要, pp.11-21.
- (4) 経済産業省 (2006) 社会人基礎力～社会でいきいきと活躍する若者の育成を目指して～. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>
- (5) 菊池武彪 (2008) キャリア教育の理念と性格. キャリア教育概説. 日本キャリア学会編. 東洋館出版社：東京, pp.12-28.
- (6) 文部科学省 (2011) 文部科学時報. 中央教育審議会. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申).
- (7) 日本学術会議 (2010) 大学と職業との接続の在り方について. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf>
- (8) 小田亮 (2011) 利他学. 新潮社：東京
- (9) 社団法人高等学校 PTA 連合会・株式会社リクルート (2011) 高校生と保護者の進路に関する意識調査. http://www.zenkoupren.org/active/2011shinrohokoku_5kai.pdf, pp.29-33.
- (10) 白木みどり (2010) キャリア教育にかかわる価値形成についての一考察. 上越教育大学研究紀要29, pp.75-86.
- (11) 内田樹 (2008) ひとりでは生きられないのも芸のうち. 文藝春秋社：東京
- (12) 内田樹 (2010) 街場のメディア論. 光文社：東京

論文

発見型柔道学習における指導教具を用いた投げ技の学習展開	共著	2013年3月	聖泉大学スポーツ文化研究所紀要（聖泉大学スポーツ文化研究所）第5巻第1号 pp.3-17	（共著者：有山篤利、藪根敏和、藤野貴之、中島啓之）
柔道非専門者を指導者とした場合の発見型柔道学習プログラムの女子学生への有効性の検証	共著	2013年5月	講道館柔道科学研究会紀要（講道館）第14号 pp.138-154	（共著者：藪根敏和、有山篤利、藤野貴之、中島啓之）
中学校武道必修化に向けての柔道指導プログラムの開発	共著	2013年5月	京都滋賀体育学研究（京都滋賀体育学会）第29巻第1号 pp.23-28	（共著者：黒澤寛己、横山勝彦、有山篤利）
柔道の受身及び投げ技習得を助ける教具の有効性の検証	共著	2013年9月	京都教育大学紀要（京都教育大学）123号 pp.17-29	（共著者：藪根敏和、有山篤利、藤野貴之、中島啓之）

教科書

中学校体育実技指導資料「はじめての柔道指導」改訂版	共著	2013年3月	武道教育研究会	（総頁数120頁、共著者：中村聡、黒澤寛己、横山勝彦、有山篤利、他5名）
---------------------------	----	---------	---------	--------------------------------------

特許

特許認可	共同	2013年4月	特許庁	柔道指導教具「投げ技マイスター」の開発。特許第5312530号（共同開発者：有山篤利、藪根敏和、藤野貴之、中島啓之、徳田伸二）
------	----	---------	-----	---

学会発表

動きのコツを学ぶ体育授業－教具を活用した学習プログラムについて考える－	共	2013年6月	第18回日本体育科教育学会ラウンドテーブル	（共同研究者：有山篤利、藪根敏和、藤野貴之、中島啓之）
武道領域が抱える課題と伝統文化の把握に関する考察－運動文化を学ぶ、柔道学習を確立するために	単	2013年8月	第63回日本体育学会	
発見学習型新受身プログラムの有効性の検証	共	2013年9月	第46回日本武道学会第1回国際武道会議	（共同研究者：藪根敏和、有山篤利）